

今年の6月下旬に、隣村のお寺で、ピアノとヴァイオリンのコンサートがあり、その、若くてすかっとした住職が、ジョン・レノンの「イマジン」の既出邦訳を朗読された。

住職が、なぜそんなにレノンに詳しいのか、徐々にわかりつつあるが、その晩をきっかけに、わたしもレノンの人となり、少しふれることになった。そこで、すでに活字になった邦訳の「イマジン」を、もっと日本人にわかりやすい日本語にしてみようということになった。邦訳はいくつかあるが、その半数には誤訳があり、強いていえば新井満さんの訳が一番妥当に思えた。しかし、もっとぴったりした日本語にできないかと、住職とわたしは、野望をいだいてしまった。

一語一語をチェックしなおしていくと、とんでもない世界にはいっていく。原詩の一行目から heaven が登場し、これがわたしたち日本人には、今ひとつわからない。辞書をひくと、たしかに〈天国〉とでていますが、天国とはなにか？ 極楽・樂園とはどうちがうのか？ there's no heaven とは、いったい何を言おうとしたのか？ もしかして、超宗教的境地を暗示したのか？ 20代後半のレノンが、そこまで考えただろうか？

住職からお借りした、レノン関係の分厚い本を数冊読み、レノンの育ったリバプールという土地の歴史をめぐり、原詩を何度も音読し、三ヶ月間の熟成を期待したのだが、ますますわからなくなった。一方、レノンの履歴については、とても詳しくなった。

レノンの命日に近い今年の12月6日には、住職のお寺で、二人の共同訳を住職の声で朗読してもらおう約束だが、10月中旬現在、まだ一行もできあがっていない。

はて、こまった。こうなったら、しばし原詩をはなれ、湖畔をゆっくり歩いてみようと、空模様を見上げた……たしかに、あそこに天はありそうだけど、天国もあるのかなあ。

雨上がりの空の下、湖畔では、吾亦紅や萩が、ススキとともに、おだやかにゆれていた。